2024年 石巻・女川合宿報告

東日本大震災の教訓を学ぶ

「あたみ荘」より網地島（あじしま）周辺の海を臨む

JFMA品質評価手法研究部会

はじめに

JFMA品質評価手法研究部会は、例年秋に、有志による合宿を行っています。大きな目的は、部会員が同じファシリティを体験して、意思疎通を図り、日頃の部会活動の議論を活性化することです。

当部会ではコロナ禍の１０年以上も前からSkypeを使って、東京にあるJFMA事務局と大阪や仙台にいる部会員とをつないで会議を開催してきました。合宿は部会員同士が直接会う大切な機会です。

毎回、地元の部会員に案内をお願いして、いくつかの見学先を訪問します。これまで、大阪、名古屋、福井、岐阜、宮城などで、オフィスビル、博物館、大学施設、寺社仏閣、歴史的住宅建築、震災遺構、城跡などを一泊２日で訪れました。毎回、数々の学びがあり、部会員それぞれが、各専門分野やこれまでの経験を通した見方や考え方を披露してくれ、移動中も宿についても、話が尽きることがありません。

これまでは部会内で共有するにとどめていたこれらの知見を、今回は報告書としてまとめて公開いたします。それは、自然災害が多発する状況下で、東日本大震災の教訓をこれからのFMにいかさなければならないと思いを強くしたからにほかなりません。

この報告書がひとりでも多くのファシリティマネジャーの目に止まり、これからの社会のために少しでも役立つことができれば幸いです。

2025年３月15日

JFMA品質評価手法研究部会　部会長　野瀬かおり

もくじ

はじめに

1．2024年　石巻・女川合宿の主旨

2. 行程　全体の地図

3. 訪問先報告

(1)日和山・津波伝承館、門脇小学校

(2)あたみ荘、ホエールタウンおしか、大川小学校

(3)女川交番、シーバルピアほか

4. 参加者所感

5. まとめ

１．2024年　石巻・女川合宿の主旨

１．2024年石巻･女川合宿の主旨

当部会では、毎年秋に一泊２日の合宿を行い、まちや施設を視察してファシリティ品質について意見を交している。

2024年は、仙台に在住する2人の部会員の案内で、石巻・女川を訪問した。

2017年に南三陸町や気仙沼など東日本大震災の被災地を巡ったことがある。当時は南三陸町の役場が竣工を間近に控え、できて間もないさんさん商店街にも活気を感じた。しかし復興に向けてまだまだ大きな重機があちらこちらでうごめいている状態であった。

それから７年が経過した被災地の様子を視察するとともに、語り部の方々と交流して、主に災害時の行動や備えなどソフト面を中心にお話をうかがうことを目的とした。

今回の合宿に参加した部会員は、次の通り。

塩川完也（フリーランス）

杉山泰教（ウシオ電機）

鈴木彰（ヤマトオートワークス）

髙橋淳（東北電力）

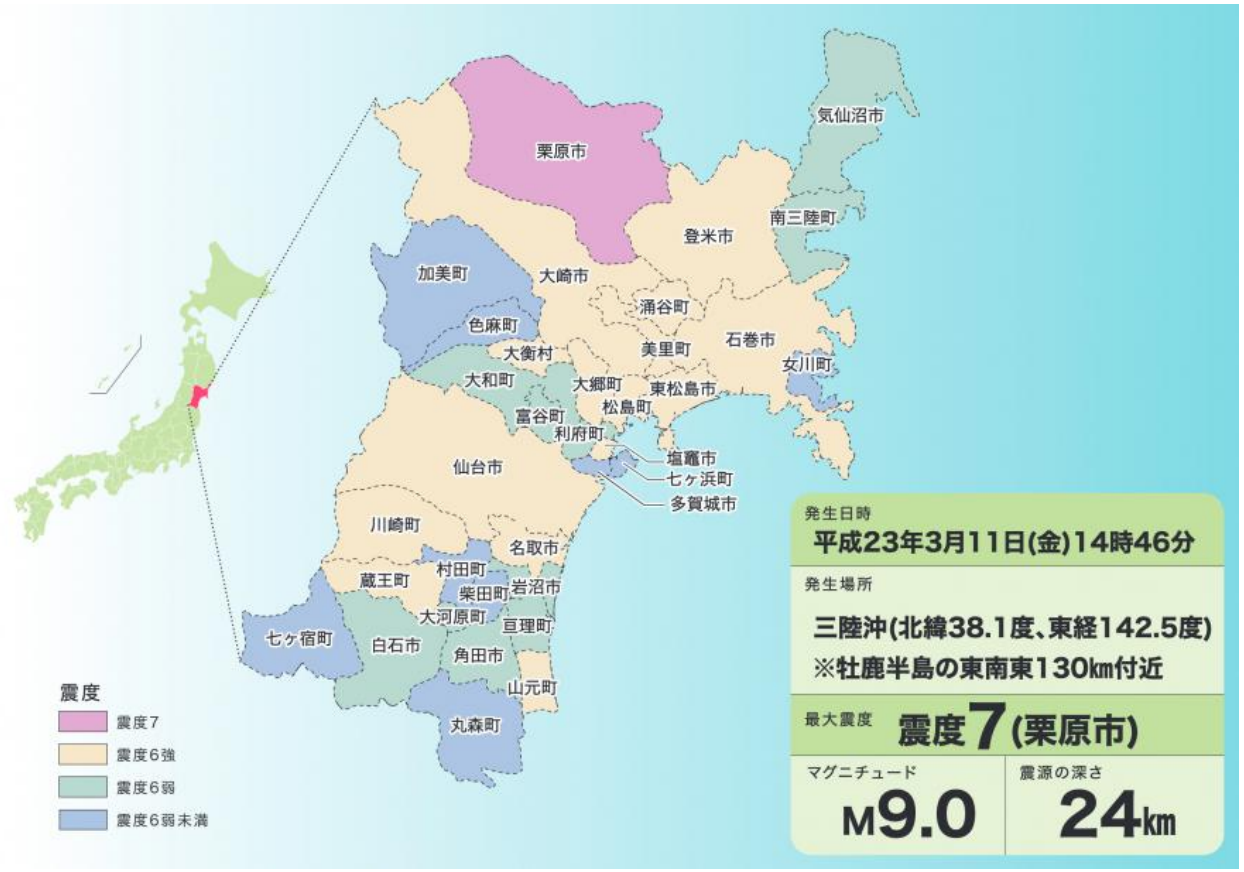
中村伸一（大和ハウス工業）

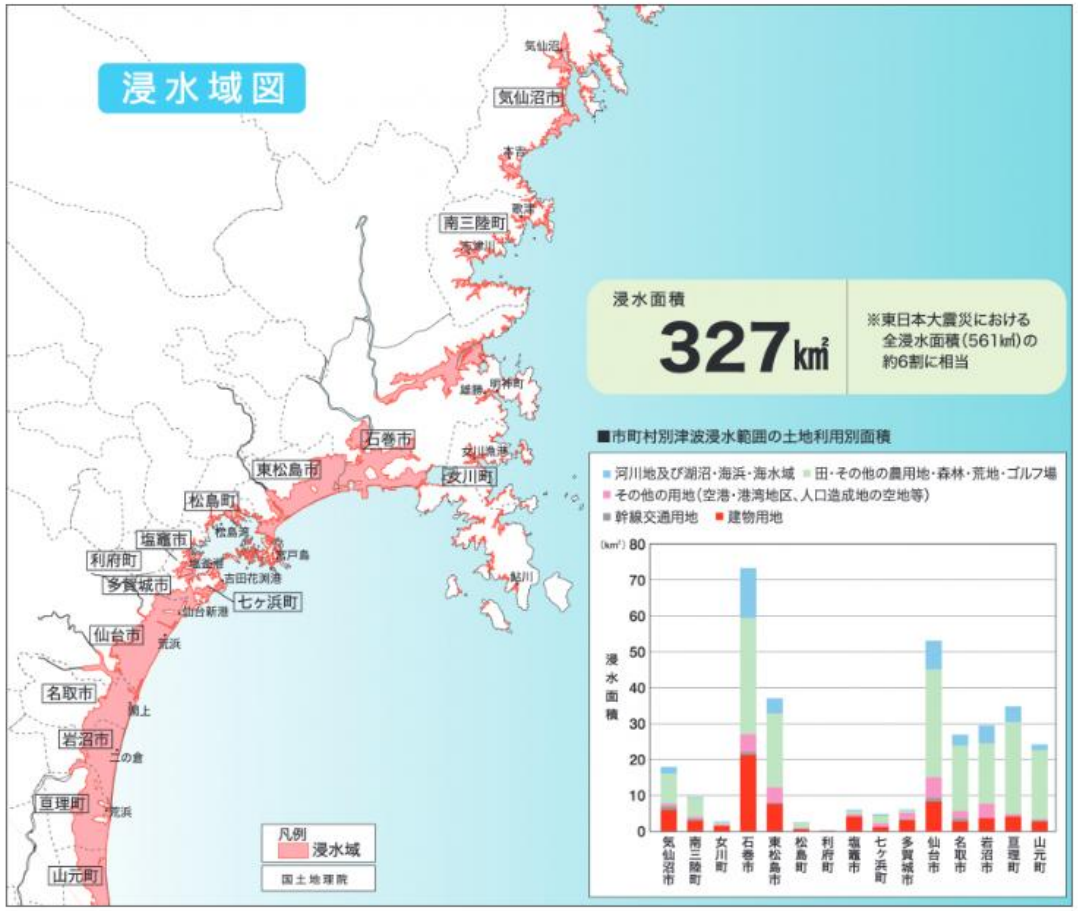
渡邉誠（ワタナベFMサービス一級建築士事務所）

２．行程

2．行程

宮城県における震災の被災状況（出典元：宮城県）





今回の合宿で訪れた場所（次ページに示す）は、大きな揺れと津波に見舞われた地域の一部。

2．行程

11/9(土)午後　石巻市視察

(1)日和山
(2)みやぎ東日本大震災津波伝承館
(3)震災遺構 門脇小学校
(4)あたみ荘(宿泊先)

11/10(日)終日　女川町・石巻市視察

(5)ホエールタウンおしか(石巻市)
(6)女川町地域医療センター
(7)震災遺構 旧女川町交番
(8)女川駅
(9)シーパルピア女川
(10)震災遺構 大川小学校(石巻市)

(高橋淳)

仙台駅からレンタカーで移動(高速道路を利用して仙台→石巻まで約1時間)

３．　訪問先報告

3．訪問先報告

(1)日和山(ひよりやま)-1

みやぎ東日本津波伝承館

門脇小学校

日和山山頂（標高56m）から南浜津波復興祈念公園を臨む

山頂にある鹿嶋御児（かしまみこ）神社

川村孫兵衛重吉像

＜石巻観光ボランティア協会によるガイド＞

合宿初日の視察は、地元のガイドさんの案内でスタートしました。車2台に分乗し、市街地の被災状況や復興の様子のお話しを伺いながら日和山へ。旧北上川沿いの街であるため「川津波」による被害が大きかったそうです。

＜日和山について＞

「日和山」とは、江戸時代に船乗りが船を出すか否かを決める際に日和を見る（天候を予測する）ために利用した山のことですが、ここ石巻では海や川の近くにある日和山が、津波からの避難場所の一つにもなっています。

　また、松尾芭蕉、石川啄木、宮沢賢治など多くの文人も訪れた石巻のシンボル的存在でもあります。

標高56ｍの小高い山で、南側の太平洋と東側の石巻市内を一望できます。

太平洋側には、震災復興のシンボルである「石巻南浜津波復興祈念公園」が見渡せ、視察先である「みやぎ東日本大震災津波伝承館」や「震災遺構門脇小学校」を見ることもできます。（塩川完也）

（塩川さん、中村さん）

3．訪問先報告

(1)日和山(ひよりやま)

日和山からの街並み

住民は、高いところに避難する意識が染みついていたため、2000名を超える多くの人が避難したものの、津波火災は想定外だったそうです。火災理由は、車のガソリン漏れ、プロパンガスとのことです。

3月9日にも地震が発生し、津波警報発令されたものの、1mの予想が実際は10cmだったため、それで油断して避難しなかった人たちもいたようです。

震災当時の様子を想像する部会員

（中村伸一）

3．訪問先報告

(1)日和山(ひよりやま)

震災後に造られた堤防

震災前は、川の水面と道路の高低差がかなり小さく、堤防もありませんでした。当時は、生活の利便性を第一に考えていたようです。　　(中村伸一)

震災前は堤防がなかった

３．訪問先報告

(2)みやぎ東日本大震災津波伝承館-1

石巻南浜津波復興祈念公園の中央に位置する建物外観

林立する細い柱で支えられた建物内部

＜津波伝承館の役割＞

・東日本大震災の記憶と教訓を永く後世に伝え継ぐこと、次なる災害への備えを確かなものにするための情報発信と交流を行うための施設です。

＜施設の特徴＞

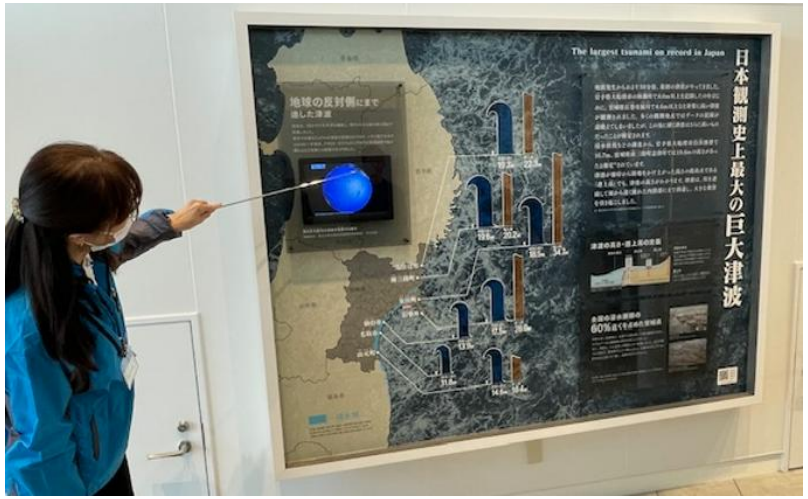
・建物の屋根は林立する細い柱で支えられ、建物周辺に植えられた樹木が成長した際に連続した空間となるようデザインされています。

・外壁を透明なガラス張りとして屋内から周辺の日和山、門脇小学校、追悼の広場などを眺めることができます。

・建物の一番高い北側の屋根の高さは6．9ｍで、この地を襲った津波が停滞したときの高さを体感できるようになっています。（塩川完也）

＜参考＞2023年グッドデザイン賞を受賞
本計画は、山下設計、ドーコン、栗生明＋北川・上田総合計画が設計。
施設は石巻南浜津波復興祈念公園内の国営追悼・祈念施設の中核です。
本計画では、先行して計画されたランドスケープに建築を重ね、
震災の記憶と祈りを次世代につなぐ風景を創出しているが評価された。

3．訪問先報告
(2)みやぎ東日本大震災津波伝承館-2



パネル説明の様子

「3.11伝承ロード」のパネル

＜シアターでの映像を視聴＞

滞在時間は短かったが、シアターでの映像や被災者の証言には心を揺さぶられました。
「自然災害は想定をはるかに超えるもの」
「津波は またかならず襲ってくる」
「津波がきたらすぐ逃げるしかない」
「だから逃げて！」 という強いメッセージがくり返されています。

＜パネルでの説明を聴く＞

「東日本大震災を知る」のコーナーでは、観測史上最大級の地震・津波による被害とその全体像を分かりやすく伝えています。改めて津波被害の大きさを再確認できました。

＜3.11伝承ロードについて＞

「3.11伝承ロード」は震災伝承施設をネットワーク化し、「震災伝承のプラットフォーム」を構築し、地域の防災力の向上と被災地の地域振興を目指すもので、青森、岩手、宮城、福島の4県に342の震災伝承施設があるとのこと。今回視察した施設のように説明員を配置している施設は67カ所。

これまでに10数カ所位は訪問したことがあるが、ここまで多くの施設があることを知りました。（塩川完也）

3．訪問先報告

(3)震災遺構門脇小学校-1

門脇小の外観

校舎2階から日和山へ避難

津波火災で被害を受けた教室内部

火災を受けた防火戸

門脇小学校は、津波火災の痕跡を残す唯一の震災遺構であり、垂直避難だけでは難しいことを伝承しています。

日頃から日和山への避難訓練が実施されていたようで、児童・教職員・保護者に至るまでスムーズに避難が行われましたが、その後、津波火災が発生し校舎は炎に包まれています。

案内していただいたガイドさんのお話しでは、津波のリスクを避けるために校舎の2階から板を架けて裏山に渡り、そこから日和山へ避難したそうです。
また、当時は雪が降っていたため滑り止めのマットなどを敷いたことなど現地へ行かなければ聴くことのできないリアルな情報に接することができました。

（中村伸一、塩川完也）

3．訪問先報告

＜施設構成と展示＞

(3)震災遺構門脇小学校-2

震災遺構の校舎（左）と展示館（中央と右）

＜施設構成と展示＞

震災遺構（本校舎）と展示館（新たに増築した部分と旧体育館を活用したスペース）を組み合わせた巧みな構成と見学順路の工夫が素晴らしいと感じました。

展示内容には、当時使用されていた仮設住宅や被災した車両などの展示もあり、貴重な体験となりました。

また、説明パネルや映像のコンテンツがとても良くできていて、視察時間が１時間では足りない充実度でした。

（塩川完也）

体育館に展示されている当時の仮設住宅

被災した車両の展示

3．訪問先報告

(4)あたみ荘 HP 石巻市牡鹿半島鮎川浜の漁師宿「あたみ荘」

とても綺麗な建物・お部屋でした

部屋からの景色

地元の新鮮な魚介を使った豪華な夕食

女将さんから震災当時のお話を聞くメンバー

- 熱海さん親子が２代でわかめ漁、民宿、小漁を営んでいらっしゃいます。
  女将さんが親切で話し好き。メンバーの根堀り葉堀りの質問に快くお答えいただきました。

- 震災前のあたみ荘は別の場所にあり、津波で流失。当時は役場庁舎で３ヵ月間の避難生活を送られたそうです。
  あたみ荘は震災から３年後に今の高台の場所で建替えられました。

- 食べきれないほどの海の幸を堪能しました。

髙橋　淳

3．訪問先報告

(5)ホエールタウンおしか

ホエールタウン（全景）

ホエールランド
（展示場内）

第16利丸（としまる）の陸上展示

ビジターセンター
（牡鹿の生活を知る）

船首で撮影、捕鯨砲が設置

物産交流施設
（クジラ料理）

・明治中期から捕鯨が始まり、鯨文化を発展させてきた鮎川浜。震災時には8mを超える津波が来て、観光施設が荒野と化してしまいました。

・被災した事業者の方々が再建に取り組み、町のシンボルである公共の観光施設「ホエールタウンおしか」が誕生しました。

・2020年7月に竣工、2021年にはグッドデザイン賞を受賞しています。

・第16利丸は約30年に渡り南極海を中心に操業。
日本で唯一乗船できる大型捕鯨船です。

・ホエールランドでは「食」「体験」「展示」を通して牡鹿半島で暮らす人々の生活や店頭文化を学ぶことができました。

・クジラ料理店やクジラの歯を加工した工芸品の販売店など牡鹿ならではのお店も入っていました。

鈴木　彰

3．訪問先報告

(7)旧女川交番

建物底面　杭引き抜き状況

建物背面　ガラス残る被害小

建物屋上側面損壊状況

震災前の建物、向かって左側に転倒

旧女川交番は、右下写真にあるように昭和55年築の鉄筋コンクリート造2階建ての建物でした。

・東日本大震災の際、引き波により杭の部分が引き抜かれ転倒したとされ、世界的にも珍しい事例とされています。

・震災当時のまま100年程度の保存を目指す見守り保存のため、周辺には草木が生い茂り、震災からの時間の経過を思わます。

・建物の側面には、硬い漂流物の衝突によってできた破壊痕跡（赤丸部分）があり、建物転倒のきっかけになった可能性もあり得ます。（杭の向きが右にねじれているので当たった衝撃で、建物は左にねじれながら倒れた？）

渡邉　誠

(8)シーパルピア女川

道の駅おながわマップ

シーパルピアから女川港をのぞむ

シーパルピアから女川駅をのぞむ

ニューこのりの穴子天丼

シーパルピア女川

今後、百年続きますようにとの若い人たちの祈りとアイデアを取り入れて復興された女川の街、道の駅おながわの一部として、シーパルピア女川は、日曜日の昼下がり、観光客、地元のみなさんでにぎわっていました。

不思議な名前の由来は、女川町のキャラクター「シーパルちゃん」がいる「ピア（桟橋）」とのこと。

おいしそうなレストランが軒を連ねる中、ランチに選んだのは、老舗「ニューこのり」の穴子入り天丼、なぜ、「ニュー」なのか不明ですが、東京では、なかなかお目にかかれない、ふっくらとやわらかく、肉厚の穴子、堪能いたしました。
ごちそうさまでした・・・・

杉山泰教

3．訪問先報告

(9)女川町の復興

女川町復興計画

女川駅舎　温泉施設yupo’po

駅舎から眺めるシーパルピア女川

駅舎後背に見える高台の住宅地

女川町復興計画

　震災のあった年の平成23年9月可決

・東日本大震災レベルの津波（L2：10m）以上の高台に住宅地を移転。

・明治三陸津波同等（L１：4.4m）に対し、海岸保全・津波防護施設を作り、都市施設・商業観光業務施設を配置、コンパクトシティを目指す。

女川駅舎

　女川の復興のシンボルとして建築家坂茂氏の設計によります。３階建て、正面から見る木造に白い膜を張った屋根のデザインは復興に向かってはばたくウミネコをイメージしています。

　正面から左側は温泉施設が併設され、駅以外の利用者が多数います。

渡邉　誠

3．訪問先報告

(10)震災遺構　大川小学校　～「大川伝承の会」の方にガイドいただきました ～

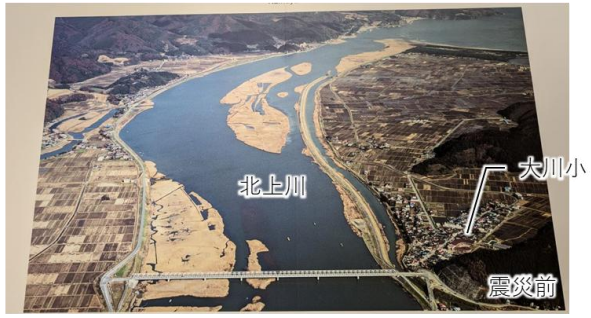
・大川小学校は海から内陸3.7kmの場所に位置し、地震発生時は誰しも津波は到達しないと思っていました。

・しかし、津波は北上川を遡上し、避難途中だった児童・教職員を襲いました。

　児童108名中74名、教員10名の尊い命が犠牲となりました。

・14:46の地震発生から15:37の津波到達までは51分間。地震発生後、即座に学校の裏山へ逃げれば助かったはずの命です。

・なぜ多くの犠牲が出たのか、数々の教訓は自分事に置き換えて非常に考えさせられる内容でした。　（鈴木彰、髙橋淳）



3．訪問先報告

(10)震災遺構　大川小学校

私たちはここで学んだことをどう語り継いでいくか…

大川小校歌のタイトル「未来を拓く」
ここは今でも「未来を拓く」場所

■ガイドさんの印象的だった言葉

・停電になれば校内放送は使えない、地震がきたら窓ガラスが割れる。そんなことは容易に想像できたはず。
　だけど、そういうことを想定した訓練をしてこなかった。**訓練は、単なる「学校行事」だった。**
　練習してないことは本番ではできない。本番は生きるか死ぬかの一度しかない。**根拠のない大丈夫**は災害のときはダメ。

・津波がこなかったのに高台に逃げるなどして、**犠牲者がいなかった学校も**あった。
　そういったところを**もっと注目すべき。**

・防災は**助かるために**やるもの（マニュアルをたくさん作って机上でやるものではない）

・その日を**どんな状態で迎えたらいいのか、**それが防災意識

髙橋　淳

4．所感

４．所感

■合宿を終えて感じたこと

◆いつも思うことだが、現地に行き、実際に見て、現地の方の話しを訊くことはとても価値がある。
今回も石巻市の観光ガイドさん、あたみ荘の女将さん、そして大川小学校での語り部の方など
被災当事者の方々の体験談が強く印象に残っている。

◆今回、「津波火災の前に無事に避難できた門脇小学校」と「隣接する山に避難できずに生徒70名という多くの犠牲者を出した大川小学校」という全く状況の異なる2つの小学校の震災遺構を視察する機会を持てたことが最も心に残った。
何が生と死を分けたのか。深く考えさせられた。その時、自分だったらどう行動したのか！
大川小学校を案内していただいた語り部の方（当時大川小学校に通っていた娘さんを津波で亡くされた当事者の方）は「命を救うのは、山ではなく『行動』だ！」と仰った。
また、中学校教師でもあった自分自身を振り返り「13年前までは、本気で避難訓練をしてこなかった」とも仰っていた。
⇒これは、他人事ではない。自分事としなくては！

塩川 完也

４．所感

- 合宿を通じて感じたこと

私の生まれた西宮も阪神淡路大震災で大きな被害を被りました。あれから
二十年、現地では、地震への備え、みなさんの体験を風化させないような努力が、
いまもなお、続いています。

東日本大震災から十四年、東北の傷跡は、まだ、　生々しく、痛んでいるように、
感じられました。

どんなに備えても常に想定外のかたちでやってくる大災害、われわれは、癒えない傷を
積み重ねながら、リスクマネジメント、クライシスマネジメントを進化させていくしか
ないと　あらためて思った次第です。

杉山泰教

４．所感

合宿を通じて考えたこと

■大規模災害を受けたことを忘れないこと、役に立つ訓練の重要性

・2017年にも視察を行い大変な災害だったという感覚をもったが、被害地域の方々は今も日々直面する忘れることができない事実だということを再認識した。
いかに伝承するかが重要な課題と思われる。

・有事に役に立つ訓練をいかに行うかが肝要ということを、大川小学校の視察で感じた。

鈴木　彰

4．所感

合宿を通じて考えたこと（→キーワード）

- **地震や津波といった災害が起こることを前提とした地域防災**

  → 防災教育・伝承、後継者の育成、ハザードマップ

- **災害に備えた施設の機能と運用**

  → 高台までの避難ルート、津波到達時間、長期に渡る避難生活

- **被災地域の施設**

  → 震災遺構の維持管理、再建の補助金、伝承施設、地域PR施設

- **国、自治体、企業、地域住民の連携**

  → 自助、共助、公助

我々、ファシリティマネジャーが関与できる部分も多いと感じた

髙橋　淳

４．所感

合宿を通じて考えたこと

大川小をガイドしてくださった方の印象的だった言葉。

- *停電になれば校内放送は使えない、地震がきたら窓ガラスが割れる。そんなことは容易に想像できたはず。だけど、そういうことを想定した訓練をしてこなかった。訓練は、単なる「行事」だった。練習してないことは本番ではできない。本番は生きるか死ぬかの一度しかない。*
- *津波がこなかったのに高台に逃げるなどして、犠牲者がいなかった学校もあった。そういったところをもっと注目すべき。*

いままで、訓練を「真剣に」取り組んでいただろうかという自問と、日頃の備えも大事だが、平時も有事も問わない「フェーズフリー」という考え方が、これからのスタンダードにすべきではないかと考えさせられた合宿であった。

中村　伸一

４．所感

- 震災伝承施設の役割
  - 岩手、宮城、福島に設置あるいは保存された３５施設は、それぞれの地域で、東日本大震災による実際の被害をそのまま後世に伝えることで、将来起こる震災に際し、「助かる命を助けるためのもの」である。

  - 100年後、風雪にさらされた震災遺構がどれだけ存続しているかわからない。震災伝承施設の役割は、リアルの遺構存続ではなく、「助かる命」を確実に救うため、その地における震災学習プログラムを、後世に着実に伝えていくことである。

渡邉　誠

岩手県
- いのちをつなぐ未来館
- 大船渡市防災学習館
- 陸前高田市立博物館
- 東日本大震災津波伝承館

宮城県
- 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館
- リアス・アーク美術館 常設展
- シャークミュージアム
- 南三陸ポータルセンター [2021年7月閉館]
- 南三陸311メモリアル
- 女川町まちなか交流館
- つなぐ館 [2020年12月閉館]
- 南浜つなぐ館
- 震災伝承交流施設 MEET門脇
- 石巻市まちづくり情報交流館（中央館） [2022年3月閉館]
- 絆の駅 石巻ニューゼ
- 石巻市震災遺構 大川小学校
- 石巻市震災遺構 門脇小学校
- みやぎ東日本大震災津波伝承館
- 東松島市震災復興伝承館
- KIBOTCHA
- せんだい3.11メモリアル交流館
- 震災遺構 仙台市立荒浜小学校
- 名取市震災復興伝承館
- 津波復興祈念資料館 閖上の記憶
- 千年希望の丘交流センター
- 山元町震災遺構 中浜小学校
- 山元町防災拠点・山下地域交流センター

福島県
- 相馬市伝承鎮魂祈念館
- 震災遺構 浪江町立請戸小学校
- 東日本大震災・原子力災害伝承館
- 双葉町ふれあい広場 [2022年1月閉館]
- 東京電力廃炉資料館
- ふたばいんふぉ
- いわき震災伝承みらい館
- コミュタン福島

５．まとめ

５．まとめ

この報告書の表紙に掲載した写真は、宿泊したあたみ荘から見た風景です。穏やかな海の向こうから、あの日、大きな大きな津波がやってきた。想像するだに恐ろしい光景です。そして生き延びた方々がいる一方で、失われた命もある。私たちはこの合宿で出会った方々から「訓練を行事化しない」「助かった事例から助かるための行動を学ぶ」という２つのことを教えてもらいました。

2025年の部会活動では、これらを踏まえてファシリティマネジャーができることを考えていきます。

今回の訪問先でお世話になったボランティアガイドの方々、温かく迎えてくださったあたみ荘の女将さんやご家族の方々に、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。
そして企画・実行に尽力してくださった部会員の中村伸一さん、髙橋淳さん、有難うございました。また、合宿に参加して有意義な情報を報告してくださった部会員有志の皆さまお疲れ様でした。

部会長　野瀬かおり

＊2025年も同様の合宿を予定しています。部会活動に興味を持たれた方は、JFMA事務局にご連絡ください。

合宿参加者　左から
髙橋淳　鈴木彰　塩川完也　杉山泰教　渡邉誠　中村伸一